



学校教育課だより
「かけはし」
【第 2 号】
平成 29 年
5 月 29 日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

ほめて育てる

教育監兼学校教育課長兼教育指導センター所長

勝亦 重夫



◇ 新学期が始まり、あつと言う間に二月月が経とうとしています。ゴールデンウィーク中には大きな事故等はなく、各学校の適切なご指導に感謝いたします。

御殿場市内では、恒例の田植えがいたる場所で行われ、水面に新緑が映えるなど心の安らぐ景色が広がっています。機械化されたとはいえ、ゴールデンウィーク中にはあちこちの田んぼで田植えを手伝っている子どもたちの姿を見て感心させられました。

「お米は農家の人が丹精込

めて作っているから大事にしましょう」と話をすると思いますが、どれだけの大変さがあるのかを実際に知っている人は少ないと思います。ただの言葉だけでは説得力はありません。人の話を聞いたり、調べたりすることで、少しでも実感を持ち子どもたちに話をするのが教員として大切なことであると思います。

◇ 先日、博報児童教育振興会から「子どもトライアング

ル調査 2016」が発表されました。この調査の対象は、小学校一年生から中学校三年生とその保護者、小中学校教員の四千六百人です。子ども・親・教員の三つの視点から子どもの評価を比較できるよう工夫されています。

「今の自分」を表す言葉で子どもの評価のトップ3は「元氣」「友達が多い」「普通」で、「将来になりたい自分」のトップ3は「元氣」「友達が多い」「やさしい」でした。その他にも頑張る言葉が上位に入っています。子どもたちが前向

きに自分を捉え、頑張っていたきたいという意識が表れていると感じました。

この調査で特に気になったのは、子どもの評価と教員の評価のギャップです。教員の評価よりも子ども自身の評価の方が高いものがいくつもありました。特に大きく差が出たのは次の三つです。①「友達が多い」+25、「ポイント、②「負けず嫌い」+23、「ポイント、③「最後まであきらめない」+20、「ポイント」というものです。

教員が思っている以上に、子どもたちは自分自身を友達が多いと評価しているし、頑張ろうという気持ちを持っていることが分かります。教員は、子どもたちをよりよくしたいという願いがあためたためでしょうか、かなり厳しめに子どもを評価しているようです。この厳しい見方を持ったままダイレクトに子どもに接すると、子どもの心との乖離が心配されます。

十六日に行われた駿東地区教育講演会の篠原菊紀さんの話の中に、子どもをほめることの大切さや、より効果的にするためにどうすればよい

かといった内容がありました。特に印象に残ったのは「努力したことを認められた子どもは、その後も難しい問題にチャレンジしようとする」という研究結果です。

子どもたちの「頑張りたい」「頑張っている」といった気持ちを、教員がしっかりと受け止め正當に評価することが、子どもたちをより前向きに頑張らせることにつながります。そこには、実感として子どもたちを前向きに捉える教員の感性が必要だと考えます。



平成二十九年度 教育指導センターの 業務について

室長 高橋正彦



新年度が始まって二カ月近くが経ちました。子どもたちは元気よく登校しているでしょうか。校種に限らず、一年生は新しい環境のなかで少し疲れも見えてくる頃です。子どもたちの体調や気持ちを気遣いながらの教育活動が求められると思います。

さて、御殿場市教育指導センターは、今年度四月から業務の拡充とそれに伴う指導員の増員を行いました。

指導員は高橋正彦、瀬戸亮策、湯山伸彦、岩田京子、芹澤ゆき子、それに特別講師として土屋英次、豊福和夫が務めさせていただきます。

業務の中にある「各学校への訪問」では、一〇七人の方について指導を予定しています。

「小学校一年生及び幼稚園年長組の参観と指導・助言」については、幼小中連携・一貫教育をより充実した実のあるものにするために、特に幼稚園年長組と小学校一年生の子どもたちと先生方に視点をしぼり、指導支援をさせていただきます。その結果が、連携・一貫教育の見直しや新たな価値づけにつながることを願っています。

願っています。

「特別支援学級担任への参観と指導・助言」については、特別支援学級の増設に伴い、特別支援教育の十分な経験がないなかで担任をする先生方を支援していきます。

「若手教員・臨時講師研修会」「ブックレットの発刊」については、今まで学校教育課の進めてきた業務を受け継ぎます。また、「教育指導センター内部組織の整備と拡充」、「御殿場市の教育のあゆみ」の発刊」等については、学校教育課に協力・連携して進めていきます。

様々な業務がありますが、中心となるのは学校訪問による先生方への指導・支援です。日々教壇に立ち、子どもたちの指導にあたられている先生方の手助けをしていきたいと思えます。

子どもたちは遊ぶとき、学んでいます。学びとは、「知っていることと、知っていること」の組み合わせから、「新しいことを知っていくこと」。

勝又教育長

「こいのぼり」、「母の日」、園の生活は季節感に満ちている

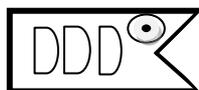


幼稚園指導員 勝又 立雄

こいのぼりが園庭にそよいでいる4月後半の幼稚園でした。「こいのぼり」「せいくらべ」の歌も流れていました。若葉鮮やかに風薫る五月晴れのなか、こうした風景の幼稚園を訪問するのはこの上ない楽しみです。

保育室に大きなこいのぼりをかけて、こいの鱗を一人一人の「染め出し」や「手形」で作ったり、本物のこいのぼりをもぐったり、みんなで持って記念撮影したりしています。

3歳児のクラスでは、小さな「マイこいのぼり」に鱗を2、3枚つけています。初めての「のりづけ」の指導です。面白かったのは、「目」のシールを貼るとき、しっぽ側に目をつけようとしている子どもがいたことです。配られた「こいのぼり」のしっぽの切れ込みが、どうしても口に見えてしまうようです。「そう見れば口に見えるな」と教えられました。



大空に泳ぐこいのぼりのもとで、みんなで汗をかいて遊び、ベランダで「かしわもち」を食べている姿も目にしました。本当に季節感あふれる園生活です。



さて、季節はいつしか「母の日」モードになっていました。どの園も母の日プレゼントづくりの活動が始まっています。わたしに寄ってきて、「プレゼント作ってるの。ママには内緒だよ」と教えてくれる子がいました。

子どもたちは、家庭に帰ってこれだけ季節を感じながら日々を送っているのだろうか、と考えてしまいます。もちろん、農家の子などは、屋敷や田や畑も広く、日々栽培や収穫などの農作業があり、季節の節目節目を感じながら成長していると思いますが、大多数の子どもの家は田植えもしないし、竹の子も掘らないしこいのぼりも上げないと思います。

御殿場市の幼稚園は、恵まれた自然と地域の協力を得ながら、こうした季節の体験や行事を通して、「**実感を伴った季節感**」「**季節体験**」を保証しているのだと思います。こうした体験が子どもの感性を豊かにし、小学校からの「学び」をより確かなものにしていくと信じています。



だんごむし みつけた!

どこ、どこ?

こっちにもいた!